かくて彼の綠の小麥は、
終日おんみにさわ〳〵と
よき音たてずや。

若し太陽が輝やき暑ければ、
おんみの毛の鎖を、そを、のべよ、
此の山毛欅の樹はかげとしてやどるによき樹、
そは汝を蔽ふに足る、
雨や山の嵐が來たならば！
そのさまをおんみは恐るゝに必要なくて
雨風はなんのものかは
此處に來るを得ざらむ。

やすめよ、羔やすめよ！
おんみは、
吾が父の遙か彼方の場所に
見出せし時の
その日を忘れたり。

多くの群は小山に居りたれど
おんみだけは
誰人の所有にもあらず、
おんみの母は
おんみの側からとはに去れり。

『父はおんみを腕に抱き
不憫に思ひ家につれ歸る、
幸福なる日よ、おんみには、
それからおんみはどこにさまよひしか、
おんみの乳母は忠實、
おんみの母親はおんみをこがる、
あの山の頂上には子供は見えざりし。

日に二度宛は此の鑵に
たえず流るゝ清き小川の新鮮な
水くんで、
おんみにもたらしてやりしを

おんみは知れり。

日に二度宛はミルクを、
土地が露にて濕める時も、
溫かく且つ新鮮さをおんみに
吾はもち來れるを
おんみは知れり。

おんみの脚がまもなく
今に倍して達者になれば
耕すときに用ふる小馬の如く
おまへに首かせつけて

小車をひかしめむ、
われ、おんみを遊び友だちとせむ、
又風寒き時ならば、
吾等が圍爐裏はおんみの床とせむ、
吾等が家はおんみの檻とせむ。

おそらくはいとも、
おんみのうちに働くものは
これぞおんみの母の心ならむ
まづしき者よ！
休まず、うまず、思ふならん。

おそらくは吾が露だにも知らぬ事が、
おんみには、
なつかしきもの、
おんみが、見もせず、聞きもせぬ者
が、夢として見るものにて
なつかしきもの。
あゝ！
あの山の頂はいとも
綠に、美しきかな！

吾は其處にくる、
恐ろしき風と暗黑を聞きおれり。

彼の小さき谿川は
すべて、氣晴の如く
又、すべて遊戯の如く
見ゆれども、
怒れる時は
ライオンが餌にとびかゝるごとくなり。

此處では、おんみは、
空の中の大鴉をおそれる必要なく、
夜も日もおんみは安泰ならん——吾等の小舍は近くにあれば、
何故おんみは

私をかくもしたつて鳴くや？
何故おんみの鎖を引くや？
眠れよ——かくて明日黎明に、吾は再びおんみの處に來たらむ。

——吾はものうき足引きずりて
小徑を通つて家路へと行きし時、
此の歌を、吾自身に
しば〳〵くりかへせり、
かくてその歌は、
吾が一行づゝにその歌詞を暗誦する時、
その半ば以上は彼女の歌ひしもの

その半ばは吾が歌ひしものなりけり。

二度、又更に、吾はその歌をくりかへせり、

『否』と、吾は言へり、『半ば以上は彼の少女の歌ひしものたるべし』と、

なぜなれば、彼女はいとも此の如き顏をして眺め、

此の如き調子にて話せばなり、

その調子は、吾が心中奥深くにほとんど徹して彼女の心を受け感ぜしがゆえに。

チンターン寺院を

數哩登りて詠める

五年(いつとせ)は過ぎぬ、

五度(いつたび)の夏、五度(いつたび)の長き冬の日とともに、

長し！

靜かなる奥山の呟(つぶやき)とともに

山の泉より落つる瀧つ瀨を

われは又聞く、

——今は又われは見る、

嶮岨なる峰々、斷崖を、

其の離隔せる場面にあつては、

いと深き隱遁の思ひを感ぜしむる、
かくて此の眺望は空の靜けさと結びつく、
われは此の蔭深き無花果の樹下なる
此の場所に憩ひ、此等は芽屋の庭の地境を見し時の其の日は來
れり、
果樹園の樹木は、
此の季節ゆえ、みのらざる果實をつけ、
一樣に綠なる色に衣つけ、
矮林と森のうちに影を沒す。

今又、われは、
此等の垣根の列、丈夫なる籬の列、

いみじくもあちこちに走る小さき森の小徑を見る、
牧歌的、田園、人この戸口まで茂る綠、
煙は花環となり、靜かに、樹木の間より昇れり、
名も定かならぬ鳥の調音あり、そは家も無き森に定めなく住ふ
者の歌ともおぼし、
又、園爐裏邊に隱者の坐せる、
隱遁者の洞からのしらべともおぼし、

此等美しき世の樣は、
永き間おとづれねどもわれには
盲目なる者の者る風景のごとくには
あらざりき。

然れども、しば〳〵われは淋しき
室ぬちにありて、又都會や町の騷がしき
さなかにありて
美しき景に感ぜり、
倦怠き時、感激の美にふる〻時も、
も血のうちに感じ、ハートに觸れ、
平靜なる再興とともに
いと清らかなる心のうちにすら過ぎ行く——
いと〻忘れたる感情の樂しさ！

かくのごとく、おそらくは、

善き人の生活の部分には、
少なからざる價値ある影響をあたへしならむ、一
彼の小さき、名も無く、忘れられたる、
親切と、愛の行爲、
彼等に對して、
吾は別なる惠を負ひ得しことは
同じく壯嚴なる樣にいと心を感ぜしと
何のことなりしこと無きものと、われは信ずる。

その祝福されたる狀態にありて、
此のすべて理解しがたき世の
神祕の重荷と

疲れしむる重みとは
輕やかにせらるゝなり――その靜かなる、
祝福されし狀態にあつて、
愛情は吾を導き進め――
つひに、此の具體的構造の呼吸と、
吾等人間の血液の運行すら止まつて
しまふまで、
吾等は肉體的に眠りにつかせられ
靈のみ生きたるものとせられる、
而して、眼は調和の力によつて
靜止せしめられ
喜びの深き力を、

吾等は事物の生命のうちに見る。
若し此が單なる水泡のごとき信仰なりせば
それでも尙、おゝ！　いかにしば〳〵――
暗黑と喜びなき白日の多くの形體の中にあつて、
怒れる騷ぎが無益なる物となりし時、
世界の激昂は
吾胸の皺動にかゝり苦しむることか――
いかにしば〳〵、わが靈魂をば、
吾はおんみへと向けしか、
お！　森林の Wye よ、
森を貫けさまよふおんみよ！

いかに、しば〳〵わが靈魂はおんみに向かはんとせしか。

かくて、今や、半ば消えんとする
思ひをかゞやかせて、
又いくたのおぼろな且つ、微かなる認識と
いとゞ悲しき困難を抱きて、
心の繪は再び蘇生せしか。

吾此處に立つ間も、
現在の樂しき感覺を抱くのみならず、
更に喜ばしき思ひは、此の瞬間の間でも、
生命あり、未來に對する、糧であり、

かくて、吾は敢へてかく望む、
たとへ、吾初めて此の山に來りて
吾が在りしことより、疑ふこともなく、
變化はあれども、
吾が鹿のごとくに、
深き小川や、
靜かなる細流のかたはら、
山の上を跳びはねし時も、
神は吾を何處にても導き給ふことを。

更に、愛するものを求めんとする
人よりも、

恐れしものより逃げ去りし
人のごとくなり、
故は、自然はその當時、
（吾が幼年の日はいとつまらなきものにて、
彼等の樂しき動物的衝動は全て過去のもの）
吾に對して最愛のものたれば、——
吾は其當時在りし吾をゑがくこと能はず、
あのひゞく瀧の音は吾には戀情のごとくに、
心にかよひ來る。

彼の高き巖、山岳、深く蔭鬱なる森、
彼等の色、彼等の形は、其の當時、

吾には食慾のごとくありき、
感情と、愛慾、そは吾をいと魅するに
用をなさず、
眼にて貸受くるものにてはなけれども
思索によつて與へられき、勿論、何の興味もあらざりしが——
——その時もすでに過ぎ去り
かくて、その總ての痛みをおぼえしほどの喜びも
今は早や無く
たゞ、すべて眩惑するがごとき有頂天のみ。
此のかすかなるわれにも非ず
勿論悲しみにても非ず
眩きにても非ず、

別なる惠そ從へり、此のごとき失ひしものに對しても、吾は、」
數限り無き報酬を信じ度し、
故は、吾は、
自然を愛を以て眺むるを學べるゆえ
かの若き日の無思慮の時にてはなく、
更に、靜かなる、悲しき人類の音樂をしば〳〵聞きしとき、
たとへ、こらしめ、服せしむる、
充分なる力ありといへども
無情な、苛だゝせることはせざりき。

かくて、吾は向上せる思想の喜悅を抱いて
吾を苦しめる存在を感ぜり。

深く混合するものより
遙か更にある何ものかの壯嚴なる
感覺、
その者の住るこそ
沒せんとする太陽の光輝であり、
囁く太洋、
生命なる空氣、
青き空、
人の心なり、
行動と精神、そは生くとし生ける
思ひある物を衝動させ

寓物を通して轉々たるものとなす。

故に、吾は今も尙、草地、森、山、と、
吾等が此の綠の地上より見渡すすべてを
愛する者なり。

眼と耳との偉大なる世界につきて——
兩者は彼等が半ば創造し
かくて受け取りしもの、
いと喜びて、
自然のうちに、
賴りとなる言葉の感覺のうちに、

吾が肉體の存在の總ての
靈魂とハートの指導者、
防禦者、乳母、及び純潔なる思想を
認知するものなり、

偶然にては無く
たとひ吾かく敎へられずとしても
吾は益々吾正しき精魂の
おとろへる苦痛を享けん。

おんみこそ此處吾と共に
あの美しの小川の堤防の上に在るもの！」

汝、吾なつかしの友！
吾なつかしき、なつかしき友よ！
汝の聲のうちに吾は、吾古への心の言葉を聞きとらへ、かくて、
あの汝の粗野な
眼の射る光りの中に古への喜びを讀まん、
おゝ！　それにても尙、吾、曾つてありし日の吾を汝のうちに
見る限りは、
吾、なつかしき、なつかしき妹よ！
此の祈りを吾は捧げん、
神は汝を愛する心をうらぎらざることを信じて、そは彼女の特
權、
吾等のこの生命のいくとせをすべて通りて喜び、喜びを導き

ぬ、
自然は、吾等が中にある心を
いとも告げうれば、
かくも、平靜と、美とを以て、衝動させ、」
高き思索をかくつちかひたり、
惡しき言葉にては非ず、
性急なる宣告、
勿論利己的の人の嘲弄にても非ず、
親切なき處には會釋なく、
すべては倦怠日々の生活の交りにても無し。

吾等が見る處のすべては、
吾等の愉快なりし信仰を混亂させ
吾等に對して勝を得させ
幸福にて充ち滿ちたり。

それ故に月をして
汝の孤獨なる散歩のうちに
汝に輝やかしめよ、
かくて霧深き山の風をして
汝に吹きにけるを止めしめよ、
かくて、後年、此等の粗末なる、
濁醉をして

嚴格なる樂しみの中になつて
熟せしめられたる時に。

汝の心をして、
全ての美しき形に對する室たらしめた時に、
汝の記憶は、
すべて美しき音調と調和に對する
住み家となるであらう、
おゝ——然らば、
若し孤獨か、恐怖か、苦痛か、悲しみかが
汝のものたらば、
いかなる優しき呪ひの治療すべき思ひを以て

汝は吾を思ひ起すや、
かくて、此等の吾苦言よ！
否、偶然――若しも吾もはや汝の聲を
聞き得ぬ處に在つたとしたならば、
過去の存在の此等輝やきし汝の眼に會ふことも得ず――汝はそ
の時、吾等共に立ちし
喜ばしき流の堤防の上に在りしを忘るゝなよ、
かくて、自然の崇拜者たりし、
吾はその務めに疲れず
此處まで來りて、
更にむしろあたゝかき愛を以て
言はん――お！　いと聖き愛の更に

深き熱心を以て言はん。
然らば汝は彼の長き後年の逍遙と、
數年の不在、此等の嶮き森と
高き斷崖とを忘るゝならむ。
かくて此の綠の園の風景は
吾にはいとなつかしきもの、
彼等自らに對しても又
汝の空に對しても
なつかしきものなり。

夢遊病者

夕暮れに
Dyulph の塔の側を通りかゝる人々よ
耳を傾け聞き給へよ、
其の時何と靜かに、
早瀬に嗄聲立てる
Aira の瀧が
茂れる森の谿谷から物語るかを！
壯嚴なる峽谷にはふさはしき音樂かな；
此の響のうちに含まるゝ
悲しき物語の精神を、

此の軟風に捕へる人には
いと此の地は神聖なものと思はれる。
かの美しき場所よりほど遠からぬ
其の處に高樓は建設(たて)られてある
物語の言ふところでは
古へ、いかめしく飾られし
家が在りしと。
明光豐かにせん爲に寶石は
飾りつけられ、充分に守護(まも)られてゐた、
輝やかしき羽毛の鳥は籠に入れられ
己が巣立ちし谿間(たにま)に

飛び去ることも願はず
美しき聲にて歌つてゐた。

此の美事なる鳥を籠より得んために、
此の美しきものを己が所有となさんために、
勇敢なる男爵等は、澤山の黄金と
いと名高き騎士等を伴なひ來れり。

然し、彼女が貴びし一人は、只一人は、
Sir Eglamare 其人であつた、
幸福に充ち滿ちたる季節が知られし時は、
汝等谿谷と丘よ！

汝に對してのみ彼等の相互の忠義は——
主に知られる Aira よ、汝の谿谷に對しては
小川と落霜紅の樹蔭があるを、
其處には情熱は、
戀は愚にすぎずと
神が教ふるを、
知る、
其處には事實は
空想と共に身を屈めて遊ぶ、
太陽は沈むことなく、
永遠不死の日通り行くごとくに
彼等の道を翼にて飛翔する時間を

さまたぐる、
疑も來ず、後悔も生じない。
然し古(いにしへ)に於ては
戀は長らくは
休憩と共に隱退させられて
居なかつた、
貞節なる望みの火はいともさかえ
敵の氣息によりて煽られた、
『征服者の槍は美人のためにして
眞實なる戀を證する』と、
Sir Egalamare はかく云ひて

うなだるゝ Emma を彼の胸に
おしつけて、
心なき別れをつけた。
二人は別れた——廣々とした地方を通り
遍歷することは、
彼に取つて首尾よきことであつたのだ、
戀の爲にこそ騎士(ナイト)は試練に出かけ、
威名を轟かさんとして名分を立てた、
いかくて彼女こそは己が幸福を
女としての貞淑なる日に建設した、
力無くかすかな事ではあるけれども

矛や楯と比較ぶれば
慰安の珠數玉や佛事供養など行ひ、
又は針仕事、や草花を植ゆ。

更に幸福なるは、Emmaが
彼女の戰士の稱讃を語り聞かせらるる
時であつた、
たとへ頭は眩暈ひ、眼はくらみ
かくて高く彼女の紅ゐの顏が
ます〳〵高潮に達しても
或は、大膽なる英雄的に倒れても
彼女は充分心から歌ふであらう、

主なき五月にも
喜ばしき花は咲くよ！
然し彼等は決して止まらず、
只々別れる爲に生れて來る。

望みは彼女とともに衰へるが、
光輝は如何なる道を撰ばうとも彼には
滿ちるのである、
何のかうそくも無いが
彼の眼は彼女が失ひし光を
うけたようであつた。

彼はもどつては來なかつた、
廣き空間は更に高尙なる行爲を
要求する
彼は遂に己が痕跡が
跡づけられぬ迄に
あまねく場所から場所へと
遊歷を進めて行つた
然しながら彼女の
空想が生れて行くことは
どんなであつたことか。

彼の名聲は擴がつたであらう、
然しながら過去に於て
彼女の精神はその中央を見出した、
明らかなる視野を彼女は
彼女がありしところの物として有してゐた
かくて、そは今や彼女を滿足せしめたで
あらう、
『今尙、彼は私の心を捧ぐる
騎士であらうか?』
涙は答へとして流れる。

月から月と

鈍重な重さを以て
落ちて行つた
日は彼女のまはりに病み
夜は空虛なる休みである、

眠りのうちに彼女は時々歩きまはつた、
深き嘆息は
早き言葉と共にまざり
蒼白き女王の如くに
彼女の兩の手は
空想せる場に爭ひつゝ
あるように見へた、

然れども彼女は血の氣の無い者である。
月はかの高きに照す
いと純潔なるものではなくなつた、
されど森を通つて彼女が
道を縫うて行くときに
彼女の憂鬱は
音立て響く洪水をよびおこす。

羊齒の叢中には鹿は眠つてゐるが
梟のみは醒きてゐる、
白き衣に身を裝ほひ

若き乙女は
下り道を取りながら
すべつて行く、
道は彼女を瀧の側
落霜紅(うめもどき)の樹陰につれてきた、
此の靜寂なる夜を何人によつて
言ひ表はしうるか？
此の淋しき場所を何人によつて
見らるか？
汝、Sir Eglamare によつてのみ
見らるゝのだ！

さまよひ歩く亡靈とこそ、
騎士(ナイト)は思つた、
彼の來る足取は、
二人が別れた幽暗のうちにて、
契りし言葉を聞きし樹陰の下にて、
横ぎつてしまつた
靜かに、靜かに、動く眠り人は見える、」
彼女の指は混亂せるごとくに
思はれる、
落霜紅(うめもどき)の綠(みどり)なる枝が引きよせられ
いとすみやかに
彼女の處より流れへと、

投げ入れられたようであつた。

その妖怪は何と言ふ者ぞ？
何故に彼の樹をいためたのか、
われは消えぬ固き契りを
その側でちかひしと
Eglamare は思つたのか？

此處に俺は居る、彼女に殘してやる、
明日の太陽をして
愛と、眞實と、勇氣を以て、
遍歷をせし時ほどには勝利は

確固に
得られぬことを
證明めてやらう。

かくて彼が立ち止りし場所より
彼はたしかなる足取を以て動き出し
かくて夜が近づきて、
彼の生々たる視力を以て
その顏彼は見て知つたのだ、
私語は聞えた、
言葉は少ない、
綠なる葉の樹に囁き、

瀧つ瀬と前つる水に
囁いた！
『叫べよ、かくて汝の叫を以て
彼をつれて來よ、
吾には聞へり、彼ならむいとゞ、
騎士(ナイト)は靈魂もチヾに
碎(くだ)けてしまつた、
勿論、それが Emma の亡靈で
あつたかどうかを知らなかつた、
又體のある者の影か、
又若しも彼女、
それ自身が其處に立つて居たならば、

彼は觸つて見たであらう
何がしたつて來たかを
誰が知るか？
おだやかに觸れても、
眠りの糸をはぢいてしまつたのだ——
卽ち彼女は叫んで後に倒れ
流れはその泡立つ床にそうて、彼女を峽谷に卷き込むでしまつた。
騎士はとび込んでしまつた、——
固き大地に救はれし乙女は横はつた、
彼女の眼は喜びの先を以て輝やかしくなつた
混亂は過ぎ去つてしまつた、

彼女の貞節なる靈魂が
美しき王座へととび行く前に
彼女は聞いた、
彼の聲を――、彼の物語るかうべを見た、」
かくして、死せんとしながらも、
彼女は彼の眞實なりしことを
彼の抱擁によつて感じるのであつた。

そこで、彼こそ命がけで
助かつたのであつた。

其の餘のことは

簡單に話し得るであらう、
その洞のうちに彼は室をたてた
そして其處には悲しみの客が居た。

彼は空虛なる當惑から逃れて
隱遁者雜草のうちに
休息を見出したのだ。

谿川の住居のほとりに――一つの深く心を抑制る響のほとりにむ
すぼれて
おそれて神を敬まつた。

波荒き Aira の流れ、

汝の道を保ちて流れよ、
決して恐るべき筋合の地では無い。
雲が壯嚴なる形にひろがる處は
黄金の光線にて緣どられてゐる。
悲しみの使者なれども
汝は天の光に對しては愛づべき者
悲しき時に於てすら
汝の聲は美しい、
かくて汝は戀人の胸の中にあつても
せいようのこぎり草の生茂れる
場所をあたへてやらう。

大正十五年一月二十日印刷
大正十五年一月二十日發行

泰西詩人叢書第十五編
ワーヅワース詩集
（定價金九十錢）

譯者　木内打魚
東京市牛込區横寺町四三
發行者　後藤誠雄
東京市牛込區早稲田鶴巻町三〇四
印刷者　熊口谷助之

發行所
東京市横寺町四三
聚英閣
電話牛込四六二番
振替東京四七八六九番

389
87

終